

これなら勝てる
**究極の
低位株
投資**

エフエーアイ
**FAI 投資法
実践編**
林 知之

はじめに ～FAI投資法の優れた点

この本の前書にあたる、拙著『究極の低位株投資術FAI投資法』の“はじめに”の冒頭は「嘘のようなすばらしい投資法である」という説明ではじまっている。

嘘のようにすばらしく、究極。これらの表現は決して誇張ではない。FAI投資法は機関投資家からも高く評価される、優れた売買法なのである。

FAI投資法の優れた点をまとめると、次のようになる。

- 1．ルールが系統立っている
- 2．低位株に限定しているので、具体的な目的が明確
- 3．資料の量は多いが種類は少なく、シンプル(迷いが無い)である
- 4．低位株を買って儲ける投資法でありながら、カラ売りを取り入れている

さらに、これらをひとまとめで表現すると、極めて実用性が高いということだ。

いくら理論が立派でも、売買を行うのは生身の人間である。

現実の相場は生身の人間が悩みながら行うのだから、やり方や考え方が複雑だと実際に実行することは困難になる。緊張した場面では

FAI投資法、およびFAIクラブの名称やロゴ等は、林投資研究所の商標登録です。その他の社名、ロゴ、製品の名称等は、一般に各社の商標または登録商標です。

免責事項

この本で紹介してある方法や技術、指標が利益を生む、あるいは損失につながることはない、と仮定してはなりません。過去の結果は必ずしも将来の結果を示したものではありません。

この本の実例は、教育的な目的でのみ用いられるものであり、売買の注文を勧めるものではありません。また投資を斡旋・推奨するものではありません。

売買の決断をしていくためには、シンプルで使いやすくなければならない。それが投資法に求められる実用性である。

F A I 投資法も、始まりはひらめきの発想と理論であったに違いないが、現実の経験から現在の30項目のルールがまとめられ、使いやすいものとして完成されたわけである。

ところが、この完成されたF A I 投資法を学ぼうとすると、真剣になればなるほど、複雑にしてしまうことが多い(これは相場に限らず、どんなものでも同じようだが)。

前書でF A I 投資法の基本的な部分を解説したが、本書では、そういう現実の難しさを考慮し、理論を用いて実際に売買を行うための注意点や具体的な考え方をまとめ、前書では書かなかった具体的な売り買いについてのルールを解説した。

この原稿を書いている2001年8月現在、F A I クラブではすでに52の銘柄を買い銘柄として選定し、メンバーや林投資研究所の研究部会員が売買を実践している。

ほんとうなら、下げ相場を予見・回避したF A I クラブが12年ぶりの銘柄選定をはじめの前に出版すべきだったが、さまざまな理由により予定が遅れてしまった。だが、おかげで(?)、古い記録だけではなく、現在の選定銘柄のいくつかを売買法の説明の実例として取り上げることができた。

日本の市場は長く暗い下げ相場、下げ末期に起きたITバブル、証券業界の完全自由化、と目まぐるしい状況が続いているが、株式

市場の成長・発展は国策であり、絶対の流れとなっている。

一般のアマチュア投資家の中から多くの成功者を輩出したF A I 投資法を学び、自分自身の取り組み方を見直す好機としていただければ幸いである。

2001年8月

林 知之

FAI投資法で 成功への道を着実に歩む 投資家になってほしい

株式投資でひと財産つくことは、投資家の最終目的である。

しかし、自分本意の方法や行き当たりばったりなやり方で売買しても、成功はおぼつかない。それどころか、大切な財産を失うのがオチである。

FAI投資法は、簡潔で、しかも完成度が極めて高い投資方法である。それは、

やり方が確立している

銘柄を選定するルールが明確である

難しいといわれている利食いの目安が決まっている

からだ。

とにかく、銘柄の選定方法から売買のやり方まで一貫して筋がとおっている。機関投資家の運用を経験している立場からみても、明らかに完成度が高いのだ。

一般的な個人投資家が株で成功するために最も近いやり方は、FAI投資法の実践である。実践といっても、難しいことはない。やり方を理解し実行すれば、初心者でも目的を達成することが可能である。

その投資方法をわかりやすく、実践に役立つように書かれてある

本書は、株で成功を目指している投資家にとって道しるべとなるものと信じている。

ぜひとも、このやり方を自分のものにして、成功への道を着実に歩んでゆく投資家になっていただきたい。

2001年8月

アナリスト、ファンドマネージャー

福田修司

編集部より

本書はOCEAN-TRADING社から協力をいただき、FAI投資法に役立つ、月足出力サービスの割引購入の特典が受けられるようになっています。詳しくは巻末をご覧ください。

編集部

Contents

はじめに～FAI投資法の優れた点.....3

FAI投資法で成功への道を着実に歩む投資家になってほしい(福田修司).....6

第1章 FAI投資法と投資クラブ

投資クラブについて.....12

実行する投資法はひとつだけ.....14

好き嫌いで選べばいい.....15

本書で解説するルールについて.....17

FAI投資法30項目のルール.....18

第2章 FAI投資法を実践するための心得と道具

1. 売買技術がすべて.....22

2. 売買技術とはなにか.....23

3. 売買技術は体の動きと同じレベルで行う.....25

4. 狭い分野に徹すること.....25

5. 場帳を使う.....27

6. 月足と場帳について.....32

7. 相場の確率.....39

8. 下げ止まったか、まだなのか.....40

9. 株数と銘柄数.....44

10. 運用効率を考える.....47

11. 資金の管理.....51

12. 注文は、必ず寄付の成り行きで.....56

第3章 FAI投資法を実践するための売買ルール

1. 売りを意識しろ.....61

2. いつ売っても利益なのに.....62

3. 相場の損切りについて.....64

4. 荒れたら手を引け.....69

5. とにかく資金をとめないこと.....74

6. 利益率を高める試み.....76

7. 3段上げ.....78

8. 3段上げの値幅.....82

9. 3段上げの期間.....86

10. 傾向が変化する前兆.....89

11. 傾向の変化がすべて.....91

12. 中段の揉み.....93

13. 大商い=目先の天井.....99

14. 新高値をつけたら...99

第4章 売買の核心となる「利食い」

1. 利食いこそ出発.....105

2. 確実に売るクセをつける.....105

3. 反射的な行動を.....106

4. 売る理由は積極的につくる.....107

第5章 FAI投資法のカラ売り

1. FAI投資法のカラ売り.....111

2. 1990年からの下げ相場.....111

3. 徹底できるか.....113

4. 真の理解が必要.....115

5. 実はカラ売りが最も簡単なのだ.....116

6. 売り銘柄は選ばなかった.....119

7. 相場の我慢.....120

8. 上げ相場の利益と下げ相場の利益.....121

9. いずれまたカラ売りの時期がくる.....121

第6章 実践力を身につけるためのポイントと注意

1. 買う対象は「買い銘柄」のみである.....127

2. 場帳は買い銘柄だけつければよい.....129

3. 24銘柄以内で均一に分散.....131

4. 分割売買.....132

5. 月足.....132

6. データ・スリップ.....134

7. 実践の段階.....137

8. 実際に売買する銘柄をどう選ぶか.....138

9. 練習売買.....138

Contents

- 10. 玉帳.....139
- 11. 利食いのタイミング.....140
- 12. 「売り」に関するルールについて.....142
- 13. 買い直し.....143
- 14. 配当の考え方.....144
- 15. 手仕舞いの理由は積極的につくる.....147
- 16. 玉帳のつけ方.....148
- 17. 目標達成銘柄について.....156
- 18. 「月曜日の新規売買禁止」について.....157

第7章 新しい時代のFAIの分析方法

- 1. 国際会計基準と連結主義.....165
- 2. 新しい時代の分析.....169
- 3. 相場は心理ゲームである.....178
- 4. 現在のFAI投資法の状況.....179
- 5. FAIクラブについて.....181

第8章 実践のためのケーススタディ

- Case1 ルール7に当てはまるようだが弱い.....185
3526 芦森工業
- Case2 ルール7を適用し、買い銘柄に選定.....189
7971 東リ
- Case3 部分的な悪い見方.....193
3526 芦森工業 / 1884日本道路
- Case4 満場一致で即買い選定.....198
4099 四国化成
- Case5 倒産を回避するための分析.....204
6102 池貝
- Case6 すべてを当てる必要はない 無配は避ける207
5631 日本製鋼所
- Case7 業績好調を高く評価.....212
4103 太陽東洋酸素

おわりに.....220

本書編集部から、月足出力サービスのご案内.....222

第1章

FAI投資法と 投資クラブ



© 1994 東洋

FAIの投資法は、下げきった低位株から2倍に値上がりする銘柄を発掘して投資し確実にものにするという、とても優れた投資方法である。

この投資法を実践する投資クラブ「FAIクラブ」は、林投資研究所の一部門として1984年6月3日に設立された（設立過程についての詳しいことは、前著を参考にしてほしい）。

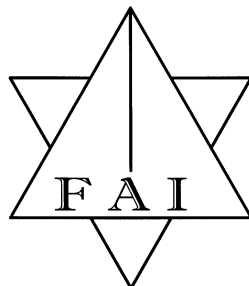
さて、このFAIクラブは、市場で安値に放置された低位株の中から、大きく上伸する銘柄を探す地味な投資方法で、確実に成果をあげてきた。また、信じ難いほどの優れた実績と、トラブルなく長期間続いている投資クラブは他に例を見ないほどだ（現在、新規メンバーの募集は行っていない）。

投資クラブについて

FAIクラブは投資クラブである。しかし、ちまたにある、投資組合としてのクラブではない。

毎月メンバーが集って銘柄選定のミーティングを開いているが、売買は個人で行う。資金を集めて全員の総意で売買決断をする、という運用はしていないし、有志で行うことも禁止している。

組合による共同運用を否定するつもりはない。ほとんどの投資家は共同運用を



FAIクラブのマーク

「勉強のため」と位置づけており、多額のトラブルになるケースは少ないようである。

だが、最終的に相場というのは個人が感覚的に行う作業であると私は考えている。だから、緊張と孤独の中で決断を迫られる、そういうストレスが売買を考える基本なのである。

しかし、孤独な作業だからこそ、悩みを話したり、議論を交わす相手を求めるのも自然だろう。投資家人口の増加、株式売買に対する意識の変化から、多くの投資クラブ、研究会が発足しているようである。

投資家という同じ種類の人間が、儲ける術を学ぶという同じ目的を持って集まったのに、トラブルでいやな思いをしたり、長続きしないようではつまらない。もし、投資クラブや研究会を発足させようとするなら、FAIクラブの良いところを手本にし、身のある活動を心がけていただきたい。

1. 具体的な目的、立場を明確にする
2. 責任の所在を明確にする
3. 運用は個人で行うことを原則とする
(共同運用をしても、責任は個人にある)

以上が基本的な注意事項である。

FAIクラブが発足して17年が経過し、1988年から2000年までの12年間は選定銘柄ゼロだったにもかかわらず、きちんと活動を継続してこられたのは、目的とするFAI投資法の優秀さのみならず、状況の変化に惑わされず、視点を変えなかった姿勢が大きかったの

である。

買い銘柄のない期間も毎月欠かさずに例会が開かれ、「まだ下げが続くそうだと12年間言い続けながらも、FAIクラブの活動内容は一切変わることがなかったのである。

実行する投資法はひとつだけ

経験があり、目のつけどころも良いのに儲からない。そういう投資家の共通点は“落ち着きがない”ことである。

仕掛け方も逃げ方も知っているのに、実際に手がけるとちぐはぐな売買になってしまい、取れるところが取れず、わずかな失敗が大きな損になってしまう。

たとえば、薬品株が好きで「薬品株ならけっこう利益が取れる」と考えているのに、IT株が動けばそれに目を奪われ、新規公開株が話題になれば手を出してしまう。

薬品株が得意ならそれを専門にして、薬品株に仕掛けるチャンスがないときには休む。休むというのはポジションは持たず、しかし値動きを追いながら自分の出番をジッと待つことだ。そして、出番が来たときには、ためらうことなく出動するのである。

それが、自分の専門で出番がないからと他の銘柄や他の投資法を行っていたら、大切にすべき専門のやり方は狂ってしまうし、専門分野の出番を見失ってしまうことになる。

FAIクラブでは、下げ相場の間「休み、またはカラ売り」の方

針を貫いた。そのカラ売りさえも、「次の出番（買い場）をジッと待ち、正しく見極める」ためのカラ売りだったのである。

たとえば、最近流行のデイ・トレードというのがある。日計り（ひばかり：その日のうちに反対売買する）、またはごくごく短期の値動きを細かく取っていく売買法である。

これを一般の人が考えると「毎日、何かしら儲かる銘柄を特別な手法で見つけて利益を出すわけですね」という理解をするのだが、とんでもない間違いである。

やはり、対象銘柄を絞るか、やり方を絞った（必然的に一定範囲に銘柄が絞られる）うえでデイ・トレードに臨み、取れないときにはジッと我慢する。つまり、ちょっと仕掛けてすぐ手仕舞ってしまうか、最初から手を出さないかである。そして、1ヵ月20日の立会日の中で「取れるべき日」が2日か3日あり、そのときにしっかりと利益を確保していくのだ。証券会社のディーラーを含め、勝っているデイ・トレーダーは例外なくそうなのである。

好き嫌いで選べばいい

前述したように、相場は個人が感覚的に行うものである。だから、「合う、合わない」「好きか嫌いか」でやり方を決めればいいのである。「どれがいちばん良いか」という絶対的な答えはなく、考え方に沿ったやり方を用意し、それに矛盾しない売買を実行するのが正解と言い切ることができるわけである。

だから、自分が好きになれそうで、長く続けられそうな投資法を選び、その投資法を自分の専門、自分の持ち味にして技術として確立していけばいいのである。

本書を読んで、FAI投資法が自分に合わないと思ったら、絶対にやるべきではない。そして、FAI投資法の長所・短所、あるいは組み立て方を参考にするとどめ、自分の好きなやり方を探してもらいたい。

もし、FAI投資法が自分に合いそうだと思ったなら、じっくりと「なぜこうなのか、なぜこれをするのか」と、ひとつひとつの意味を考えながら、本書を何度も読みかえしてほしい。そして、真剣に実践してみたいと思ったのなら、林投資研究所の研究部会員になり、研究部会報に掲載されるFAIクラブの選定銘柄を売買するのが、成功への近道である。もちろん、研究部会員にならなくても、本書の内容は実行可能だ。しかし、“完成品”として存在するものをそのまま実践して売買技術を身につけ、そのうえで銘柄選定のやり方を学ぶ段階に進むことが、もっとも容易な上達法である。

ひとつの流儀を継続し一定の水準に達すれば、他の売買法について何も知らなくても相場の名人である。そして、他の売買法に移行しても、身につけた基本はそのまま通じるのである。しかし、フラフラと複数のやり方を同時に行っていたら、どっちつかずで何も身につかないことになる。

決してむずかしいことはない。自分の好きな方法を選べばいいだけなのだ。そしてそれが成功する大事な第一歩なのである。

本書で解説するルールについて

前著『究極の低位株投資術FAI投資法』では、30項目のルールから銘柄選定に関するものを取り上げて解説した。

あらためてルールの全文を掲載するが、本書ではルール15、17、18、27、28、29、30についての解説をし、実践のために必要な知識を完結したつもりである。

が、本書の冒頭でもふれたように現実には難しいものである。

迷ったときには手を引き、シンプルな方向に考えをまとめて進んでいただきたい。

FAI投資法 30項目のルール

- 1 4～5年下げ、3段下げ完了の銘柄を買う
- 2 2番底形成を待つ
- 3 下に來ての6連続陰線に注意
W型の底、または小さくとも毛抜きの出るのを待つ
- 4 20本下げは20本上がる
ただらだと30本下げたものを10本で切り返すと大きく3段上げを見せる
- 5 三角形に注意
切り上がり、二等辺、切り下がり、各三角形のうち切り上がり三角形が最も強い
とくに2～3年あるいはそれ以上かかって形成された三角形は大きく上伸する
- 6 1株あたり純資産に食い込んだら注意
- 7 2番底の陰線下部の十字は直ちに買い
- 8 三角形の先端陰線下部の十字は直ちに買い
- 9 安値にきての5連続陽線は買いの準備
次の2連続陰線を見てから買い
- 10 すべて小動きになったあとの兆し陽線に注意
そのあとの陰線2本を見て買い
- 11 保合、または安値からの最大陽線は、そのあとの2/3押しで買い
- 12 W型、M型後の切り返し（両抜きも）は上げのはじめ
- 13 6～12ヵ月（またはそれ以上でも）の上げ下げが90°（前後）のとき、その下げトレンドを上抜く陽線は上げの第一歩
- 14 過去4～5本を一気に上抜く陽線は上げの兆し
- 15 買うときは2分割またはそれ以上の分割で、細かく分けるときは下値ほど厚く買う
- 16 ボーダーライン（切り上がり三角形の上辺）を超えたら5円上抜きをみて買い
- 17 上離れ3陽線のあと3本目の陽線の半分以下に陰線が食い込んだら上げ幅の半分下がる
- 18 1段上げは約100円。しかし、70～80円で利食いする
- 19 上げ途上のプラットフォーム（ボックスの上辺）を抜いたら5円上抜きで買い。陽線3本をみて売り手仕舞い。再び下げてきたときにプラットフォームの20円上で買い
- 20 1株あたり純資産の増加は買い。3期連続増加は絶好。ただし、ここで3連続陽線などで上げていれば売り
- 21 日本証券決済が大株主10位以内に出てきたら買い
- 22 人員整理および資産売却は買い
- 23 経常利益予想が30%以上増加だったら注意
- 24 同業種の先導銘柄が上伸に転じたら注目銘柄に注意、買いの準備
- 25 5期連続無配および債務超過はチャートが良くても避ける

- 26 前期が赤字で、今期が経常または税引きトントンの銘柄に注意
- 27 発行株数の5%以上の出来高を見せたら、4日目に利食い
- 28 1段上げでも、2段上げでも、陰線の両抜きが出たら（出そうでも）いったん利食い
- 29 10年またはそれ以前の高値でも、それを抜いて新高値をつけたときはいったん売り
27、28、29項およびその他いったん利食いした後買い直すとき、または買い増しするときは出来高が細ったときにする
- 30 3段上げは天井
3段上げで売り
3段目の5連続陽線は売り

資金の2割以上は常に余裕を持つ

信用取引買いは絶対禁止

信用取引売りは、この方式3年またはそれ以上の経験後、資本300億円以上の銘柄のうねりを見て行う

注)

- ・ 印は銘柄選択のルール。このうち、8つ以上のルールが適合したら、それを選定銘柄とする。ただし、1項目か2項目でも非常に強大であるなら選定することもありえる。
- ・ 印のルールは、非常に低位の、または不況の時期で動きが詰まっている（小動き）場合にのみしか出現しない。
- ・ F A I方式は低位株投資法であるが、低位といっても「いくら以下」と定められたものではない。一応「400円以下」と決めている。

第2章

FAI投資法を 実践するための 心得と道具



1. 売買技術がすべて

FAI投資法は、売買する銘柄を固定しない売買法である。

銘柄を固定する売買のほうが「慣れ」によって有利であることは当然なのだが、FAI投資法は低位株に限定し、「ダメなものが良くなる」過程を狙うのだから、銘柄を選別し、入れ替えていく売買になる。ただし、ちまたにある「仕手株情報」のような日替わりのなものではないことを、まず認識しておいてほしい。

そして実践においては、「できる限り固定銘柄式」な売買を継続することが、利益を伸ばすことにつながる。そういう実践力を身につけてもらうためのヒント・心得・練習方法を、本章で書いていくことにする。

FAIクラブでは、徹底した分析と正しい討論によって、選定する銘柄が利益になる確率が極めて高い。しかし、その銘柄を単に買うだけで儲かるものではない。

「上昇の予想が当たり、それを買っていたら、だれでも儲かるに決まっている！」との反論があるだろうが、実際は断じて違う。メンバーから多くの成功者を出した1980年代においても、損ばかりしていたメンバーが実在した。毎月の例会にもほとんど出席している人だったので、他のメンバーが一生懸命アドバイスを続けたにもかかわらず、とうとう成果を上げることができなかった。

銘柄が選定されるとメンバーを含めたFAI実践者は、独自に月足を見て、日々の価格を場帳（ばちょう：詳しくは後述する）で見ながら、慎重に安値を拾って買っていく。ところがこの人は、市場

のムードや証券会社のセールスの言葉で飛びついて買う悪い癖がしみついてしまっていたため、上がってきたところで「いよいよ大暴騰か！」と、分の悪い勝負に出て買ってしまう。安値をていねいに拾った人たちが涼しい顔で利食い売りをする時期に、順張りで買いついてしまうのだ。

利食いをした人が再び買い直しを狙う頃には、目先の高値で買った玉（ぎょく：保有する株のポジション）に嫌気がさし、他の銘柄を買うために損切りしてしまう。当然次の銘柄も順張りだ。

こんなことを繰り返していても、たまたま利益になるときもある。ところが、それが偶然であることに気がつかないから、間違ったやり方を続けてしまったのである。

その人だけはどうしても救えなかったのが、クラブとしては残念でならないし、恥なのであるが、「売買の技法＝実践力が大切」であることを証明する例として書かせてもらった。

2. 売買技術とはなにか

「売買技術がすべて」と書いたが、誤解のないように解説をしておくことにする。つまり「売買技術」とは何を意味するのか、どう定義できるのか、である。

売買を行うには、最初に投資法というものがある。これは、「どういう銘柄を対象に、どういう動きを狙って売買をするのか」というものだ。

FAI投資法は、文字通り投資法のひとつである。そして、その投資法（FAI投資法）にもとづいて実際にポジションをつくり、値動きを追いかけるのが、具体的な売買（実践）である。

実践は、それを実行する人によって違ってくる。きわめて個人的な、感覚的な、好みを強く反映したものになる。ただし、「個人的な好み」と「自分勝手」とは違うことを、よく理解してほしい。FAI投資法なのだから、実践もFAI投資法の範囲内で、FAI投資法の目的に合った内容とならなければならない。

こうして具体的な売買のイメージなり、戦略が個人的に完成し、いよいよ実行に入るわけである。

実行段階は、投資法や売買戦略を考えているときと区別しなくてはならない。値動きの中でポジションを持ち、心理的圧迫を受けながら素早い判断をしていく必要があり、**戦略を見直しながら売買の決断をしてはいけない**のである。

なぜなら、戦略の段階に戻って考えるということは、「値動きを当てたい」と思うことであり、無限に答えがある、つまり「絶対に答えの出ない」ことで悩むことになるからである。「明日の相場を当てる術は存在しない」という大前提のもとに、投資法・売買戦略を立てたのである。

だから、売買の決断は、あらかじめ決められた戦略に応じて反射的に判断する作業が求められる。スポーツで、相手の動きやボールの動きに反応して動くのと同じことである。

この能力が売買技術であり、**頭で理論的に考えられる段階とは、明らかに違うものなのである。**

3. 売買技術は体の動きと同じレベルで行う

売買技術の定義で、「頭で理論的に考えられる段階とは、明らかに違うものなのである」と書いたが、広義では反射的な売買行動に限定されたものとはいえない。なぜなら、最終的な（儲けることを目的とした）売買行動のために投資法を確立し、それに沿った戦略をつくっていく思考の作業があるからだ。

前述した通り、「戦略を見直しながら売買の決断をしてはいけない」のであるが、ポジションがゼロのときに売買結果を分析して、戦略、場合によっては投資法そのものやその投資法にたどり着いた経緯までも見直すことはあるわけである。

ただし、現実に売買の決断を迫られる場面では、やはり反射的に行動する必要があり、「言葉をしゃべる」「歩く」といった熟練した体の動きと同じレベルで行うことが理想である。たとえ試行錯誤の段階であっても、そういう自然体の行動をしなければ、売買結果が売買を見直すための正しいデータにはならない、といえる。

4. 狭い分野に徹すること

売買は技術である、という前提で考えると、銘柄をとことん絞り、その銘柄以外は一切見ないというやり方が基本となるが、FAI投資法は条件に合った銘柄を多く選定して、分散投資するやり方であ

る。このことについて説明したい。

一般的には「どの銘柄を買って保有するのが一番有利か」ということと「それを多くのデータをもとに当てよう」という株式投資が行われている。このようなやり方は「銘柄至上主義」であり、完全な「買い偏重」といえる。選別の基準が明確でないダボハゼ投資であり、われわれプロは全面的に否定しているやり方である。

株価の変動は目まぐるしいから、物理的に利益を取ることが可能な場所はいくらでもある。しかし、相場を実行するうえで実際に取ることのできる範囲は限定的になる。

たとえば、1銘柄だけに限定した、銘柄固定式の売買を考えてみよう。銘柄は1つだけだから迷いは少ないが、どこで仕掛けるかについては無限の迷いが生じる。物理的に利益になる可能性がある以上、それらをすべてモノにしたいと考えてしまいがちである。しかし、値動きにはいろいろなパターンがあり、どのパターンをどのように狙うかが明確になっていないと、感覚と技術を向上させて継続的に勝つことは不可能である。

このように、絞って絞って確実な勝ちと被害の少ない負けを繰り返しながら、**地味な作業を続けるのが相場の王道**なのである。

では、多数の銘柄を選定するFAI投資法とダボハゼ投資は、何が違うのだろうか。FAI投資法は、銘柄を固定しないかわりに、銘柄の選定方法と売買のやり方を限定している。これが大きな違いなのである。

FAIクラブは1980年代の上げ相場で積極的に銘柄を選定して成功したが、1988年には「相場が過熱しているので危険である」と判

断し、銘柄の選定をせずに下げ相場のカラ売りを準備しはじめた。

予想通り、1989年は指数がジリ高で市場はにぎわっていたのにもかかわらず、個別の銘柄の伸びは悪く、1990年からご存じの大暴落の始まりとなった。下げ相場の中、「地味なカラ売り」、あるいは「休み」の方針で臨み、再びFAI投資法に当てはまる銘柄（月足の形）が出るのを待ったのである。

その間、店頭株が動こうが、IT関連がばか上げしようが、一切目を向けなかった。また、暴落の最中に、対象とする東証1部の中で安値から2倍、3倍の値上がりをみせた銘柄もあったが、結果だけを見て「逃した、損した」と考えることはせず、ひたすらFAIの型にきっちり当てはまるものが出るまで、12年間待ち続けたのである。

ここまで徹底することで、一見アマチュア的でありながら、しっかりとしたプロの投資法として、成り立っているのである。

少しかたい説明になってしまったが、銘柄固定式がしょうゆラーメンの専門店なら、FAI投資法はさしずめ点心の専門店といえるだろう。

5. 場帳を使う

銘柄の選定では、月足（ローソク）を使用する。そして、実際の売買では、日々の終値と出来高を手書きで記した場帳を使用する。

銘柄選定後にも月足は描き足しながら見ていくが、「1ヵ月上が

って1ヵ月下がった」というような細かいうねりは、やはり日々の動きを見ていかないとわからない。だから、例のように日付と終値を数字で書いていく場帳というものを使用して、具体的な売り買いのタイミングを決めていくのである。

この場帳というものは、たいへん合理的なやり方である。なじみのあるチャート（日足ローソク、日足終値折れ線等）にしないとわかりにくいという人が多いが、大局、あるいは中期的な上げ下げを見るために月足を使うので、日足チャートを使っははいけない（理由は後述する）。

場帳のつけかた・見方

- ・左に日付を書く
- ・各銘柄の終値と出来高を書く
- ・土・日・祝日（立会のない日）の日付は書かない（金曜日の次の日は月曜日になる）
- ・自分の売買など、余分なことを一切書き込まない
- ・終値だけのシンプルなデータで、株価のうねりを見る
- ・変動の値幅よりも、うねりの山・谷の日柄（日数、時間の経過）を注意する

（場帳の見方については、あとで詳しく述べる）

場帳の用紙について

場帳は、自分でつくってもよいが、私が経営する林投資研究所オリジナルの用紙もある。これは縦長のB4サイズで、1枚に6銘柄、

図表2-1 とても合理的にできている場帳

	6203 豊和工		6316 丸山製		6462 リケン				
23	12.5	57	13.1	5	15.4	71			
24	12.7	53	12.6	47	14.6	67			
27	12.1	32	12.2	17	13.2	51			
28	12.1	32	12.2	17	13.2	51			
29	12.1	32	12.2	17	13.2	51			
30	12.4	42	12.1	43	13.2	37			
31	12.4	42	12.1	43	13.2	37			
4	12.2	113	12.4	11	12.2	114			
5	12.1	47	12.4	11	12.2	114			
6	12.1	47	12.4	11	12.2	114			
7	12.4	47	12.2	16	12.4	114			
8	12.3	47	12.3	16	12.2	114			
11	12.2	47	12.3	13	12.1	114			
12	12.1	17	12.3	16	12.1	114			
13	12.2	16	12.1	16	12.1	114			
14	12.2	16	12.1	16	12.1	114			
16	12.1	71	12.1	16	12.1	114			
18	12.2	47	12.2	16	12.1	114			
19	12.1	91	12.2	16	12.1	114			
20	12.3	47	12.1	16	12.1	114			
21	12.3	47	12.1	16	12.1	114			
22	12.4	114	12.1	16	12.1	114			
25	12.2	76	12.1	16	12.1	114			
26	12.2	31	12.2	16	12.1	114			
27	12.2	31	12.2	16	12.1	114			
28	12.2	31	12.2	16	12.1	114			
29	12.2	31	12.1	16	12.1	114			
31	12.1	31	12.1	16	12.1	114			
4	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
5	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
6	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
10	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
11	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
12	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
15	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
16	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
17	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
18	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
19	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
20	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
23	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
24	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
25	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
26	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
29	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
30	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
31	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
2	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
3	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
5	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
6	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
7	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
8	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
9	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
13	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
14	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
15	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
18	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
19	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
20	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
21	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
22	12.1	114	12.1	16	12.1	114			
23	12.1	114	12.1	16	12.1	114			

図表2-2 B4サイズのオリジナル場帳

The image shows a B4 size original ledger with multiple columns and rows. The ledger is partially unrolled, showing the top edge of the next page. The columns are labeled with handwritten text and numbers. The rows contain handwritten entries, likely representing financial or accounting data. The ledger is placed on a dark wooden surface.

4097 新庄ガス	4094 ハチワタ	4044 東洋	4027 伊予
1	1	1	1
2	2	2	2
3	3	3	3
4	4	4	4
5	5	5	5
6	6	6	6
7	7	7	7
8	8	8	8
9	9	9	9
10	10	10	10
11	11	11	11
12	12	12	12
13	13	13	13
14	14	14	14
15	15	15	15
16	16	16	16
17	17	17	17
18	18	18	18
19	19	19	19
20	20	20	20
21	21	21	21
22	22	22	22
23	23	23	23
24	24	24	24
25	25	25	25
26	26	26	26
27	27	27	27
28	28	28	28
29	29	29	29
30	30	30	30
31	31	31	31
32	32	32	32
33	33	33	33
34	34	34	34
35	35	35	35
36	36	36	36
37	37	37	37
38	38	38	38
39	39	39	39
40	40	40	40
41	41	41	41
42	42	42	42
43	43	43	43
44	44	44	44
45	45	45	45
46	46	46	46
47	47	47	47
48	48	48	48
49	49	49	49
50	50	50	50
51	51	51	51
52	52	52	52
53	53	53	53
54	54	54	54
55	55	55	55
56	56	56	56
57	57	57	57
58	58	58	58
59	59	59	59
60	60	60	60
61	61	61	61
62	62	62	62
63	63	63	63
64	64	64	64
65	65	65	65
66	66	66	66
67	67	67	67
68	68	68	68
69	69	69	69
70	70	70	70
71	71	71	71
72	72	72	72
73	73	73	73
74	74	74	74
75	75	75	75
76	76	76	76
77	77	77	77
78	78	78	78
79	79	79	79
80	80	80	80
81	81	81	81
82	82	82	82
83	83	83	83
84	84	84	84
85	85	85	85
86	86	86	86
87	87	87	87
88	88	88	88
89	89	89	89
90	90	90	90
91	91	91	91
92	92	92	92
93	93	93	93
94	94	94	94
95	95	95	95
96	96	96	96
97	97	97	97
98	98	98	98
99	99	99	99
100	100	100	100

62日分を書くことができる。線の色は茶色で、黒のペンで書き込んだとき、とても見やすくなっている。また、「B4サイズで62日分」が大きさも適当であり、株価のうねりの日数（平均約60日）を考えたとき、使いやすいようにつくられている。

「1枚に6銘柄」だから、10枚あれば60銘柄を書くことができるが、各ページにびっしりと数字が書いてあると、見ていてイヤになるものだ。

私の場帳では、コード番号順に、「1枚に2銘柄だけ」のページもあれば、「1枚に4～5銘柄」のページもある。別に業種を気にしたりすることはないのだが、コード番号順になっていれば、新聞あるいはパソコンから書き写しやすい。また、適当に隙間を空けてページごとにアクセントをつけ、新しい銘柄が出たときに入れることができるようにしているのである。

6. 月足と場帳について

1) 直接法と間接法

価格データを処理する方法には、**直接法**と**間接法**という区別がある。直接法は価格データを一切加工しないやり方で、間接法というのは、さまざまな加工を行うものである。

FAI投資法で使用する月足も場帳も、直接法である。

間接法で代表的なものは、移動平均線である。実際の値動きをチャートとして描き、そこに実際の値動きとは別のデータ（値動きか

らつくったものだが）を重ねて描く。他にも統計処理の数学を使って何らかの数値を導き出し、チャートに重ねたり、単独で判断の基準に使用するものが無数にある。

個々の解説は省くが、間接法は安易に用いるべきものではないと私は考えている。

間接法は、

1. 実際の値動きをもとに
2. 実際の値動きとは異なるもの（データ）をつくり出し
3. それによって売買の判断を行い
4. 最終的に対象とするのは、実際の値動き

というプロセスになるから、複雑になってしまう。結果、売買結果を見直したり、売買の判断について見直したりする際の、基準をつくるのがむずかしくなってしまう。つまり、売買のためのノウハウの積み重ねが正しくできないわけである。

もうひとつ、どこまで売買の判断として有効か、という問題がある。前述のようにプロセスが複雑という理由から、「確率が落ちるはずである」と考えられる。もちろん、データの加工の目的が「予測不能の相場において、何らかの絶対的な法則を見いだそう」というものであるから、「確率が落ちる」と言い切ってしまうと反論を招くかもしれない。

だが、一時的に通用するものならともかく、普遍的な法則があるのなら、市場そのものが成り立たないことになる。だから「予測は当然、当たったり外れたりする」という前提で、

1. 資金の運用
2. そのための具体的な売買技法
3. 売買技法に影響する心理的要素（売買技法に含まれるが）
4. 利益を正しく蓄積していくための心得

を考え、「予測＝とりあえずの行動のきっかけ」と割り切ってしまうのが相場技術論なのである。

だから、**データはできる限りシンプルにとどめ、相場技術を積み重ねながら売買を継続していくことに集中しよう**、というのである。

2) 日足チャート禁止

本章の 5. **場帳を使う** で、「月足を使うので、日足チャートは使っちゃいけない」と書いた。このことについて、詳しく説明する。

ホーネン（2601）を例にとって、月足と日足を並べたので見てほしい（図表2-3、図表2-4）。

月足は、毎日の株価を月という単位で区切り、それを視覚的に見ることが目的に、白黒の四角と上下の線（ヒゲ）にして表しているわけだ。これはデータそのものを加工していないから直接法なのだが、株価には白や黒の色がついているわけではないのだから、厳密に言えば加工されていることになる。

では、日足チャートはどうだろうか。FAIの月足のようなローソク足ではなく、終値の折れ線チャートで考えてみよう。日々の終値を点で表し、横軸（時間の経過）は1日＝2mmとして書いていく。そして、終値（の点）を線で結んでいく。これもやはり一種の

加工である。

つまり、厳密な意味では「チャートは視覚的に動きをとらえるために加工されたもの」ということになる。だから、月足と日足のチャートを一緒に使った場合、絵として表現された価格情報が2種類混在することになり、「感覚で相場を見ていく」という実践の段階で混乱してしまうことになるのである。

複数のデータを同時に見る場合、それらは「儲ける」「適切なポジションを取る」という目的のための判断の基準として正しく整理・混合される必要がある。しかし、株価は多くの参加者の感情で動いているのだから、限界は意外と低い。それでも「当てたい」と考えてしまうから、限界を越えて多くのデータを集め、迷いと後悔しか生まない進歩のない状況に陥ってしまうのである。

くどくなるが、相場の判断のために使う情報は「シンプルほどよい」のである。

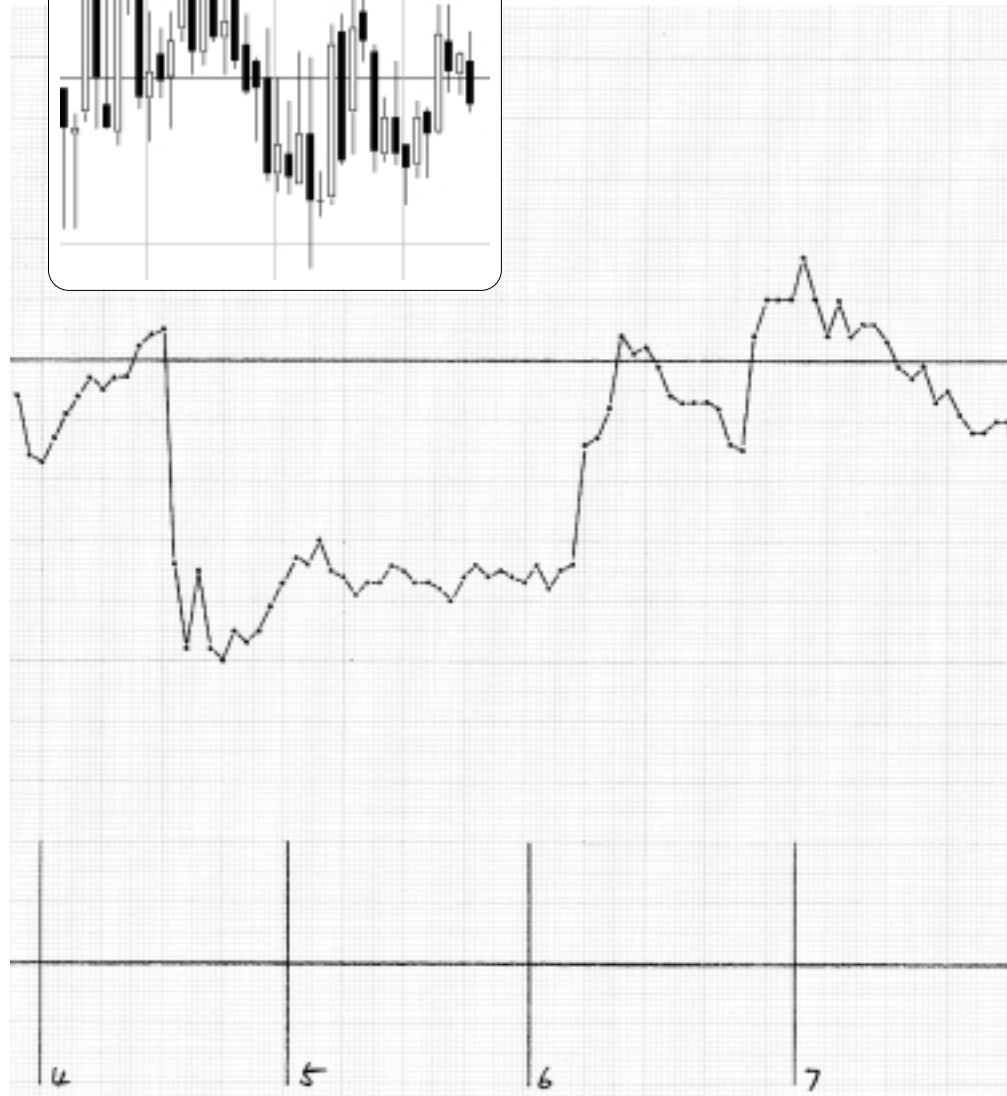
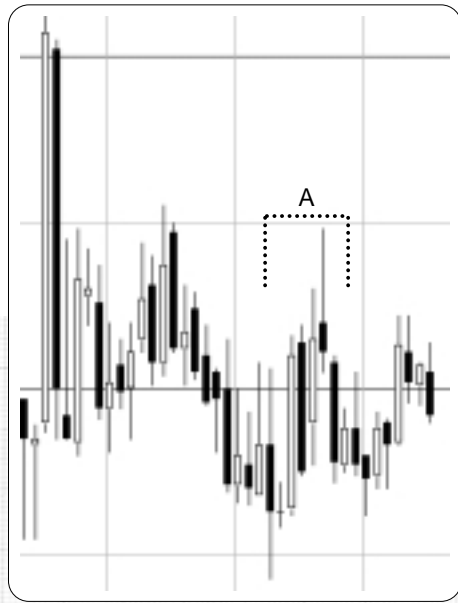
多少の無理は承知で、例を出してみよう。

自動車にバックミラーがついているが、両サイドについているサイドミラーと、真後ろが写るルームミラーがある。写る場所が一部重なるが、それぞれの役割があり、お互いの欠点を補っている。しかし、屈折率の異なるルームミラーをもうひとつつけていたら、2つのルームミラーに写る、大きさの違う後方車の情報で混乱してしまうだろう。

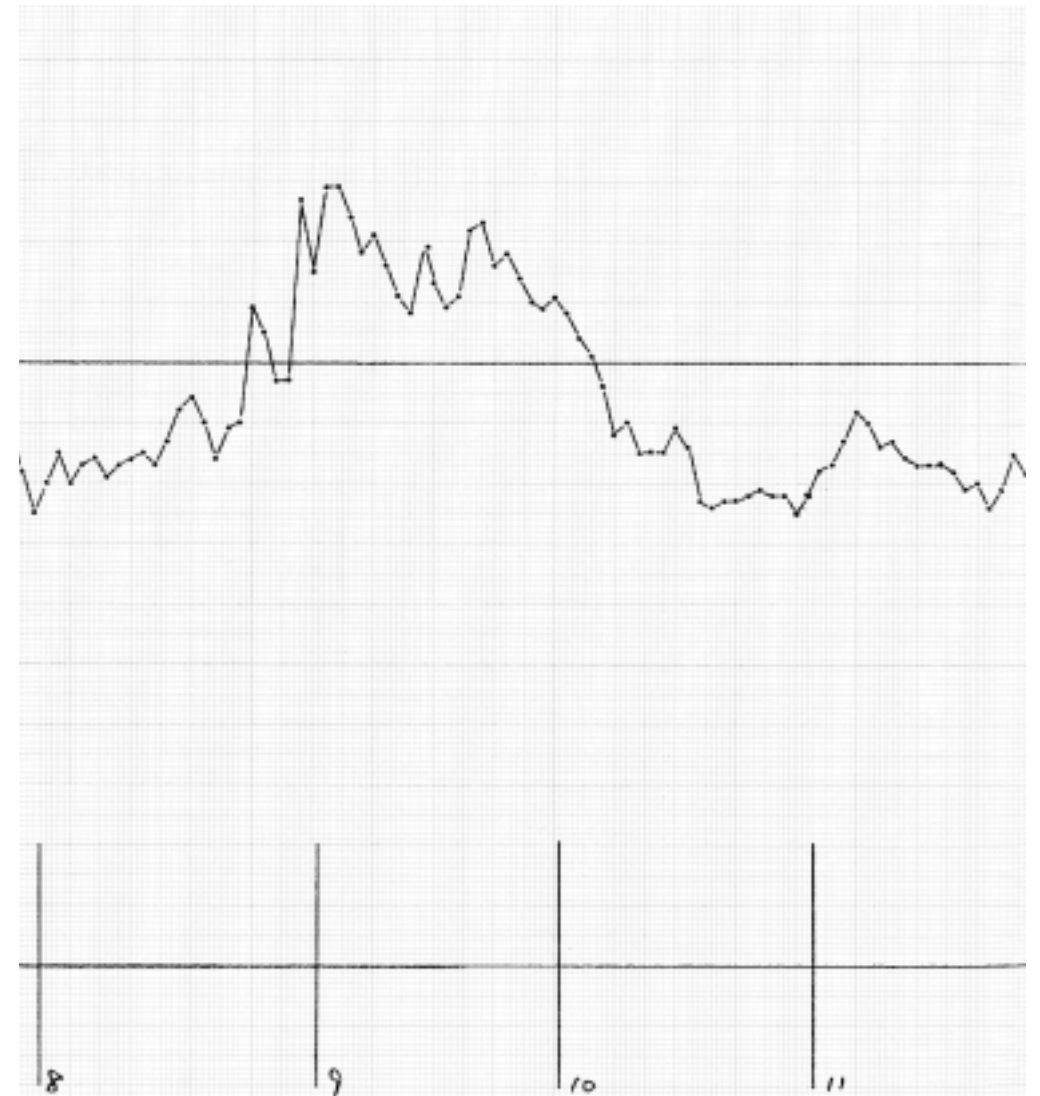
では、同じく車に関連して、地図を考えてみよう。

目的地に行くために、まず高速道路と降りたあとの、大きな道路をチェックする。そして、目的地付近は縮尺の違う地図で細かい道

図表2-3
 ホーネン(2601)の月足チャート
 1998/5 ~ 2001/8



図表2-4 ホーネン(2601)の日足折れ線チャート
 2000/4 ~ 2000/11(期間は月足のAの部分)



を確認することになる。つまり、2種類の地図をつかうわけだ。この2種類の地図を、月足チャート・日足チャートの同時使用と同じである、という人がいるが、これは間違い。地図は現実に存在するものをそのまま絵にしたわけで、絵にするためのデータ作成の方法が最初から違う、月足と日足に当てはめることはできない。地図の縮尺の違いは、「チャートを近づいて見るか離れて見るか」の違いと同じなのである。

さて、それでも「理屈は納得するが、帳簿のように数字を並べた場帳というものには抵抗がある」「値動きのうねりをとらえるのなら、やはりチャートがいいのではないか」と感じてしまう人も多いだろう。

スムーズに「月足と場帳」の形がやりにくいのなら、一時的に場帳と終値折れ線の日足を併用する方法がある。そして、日足の折れ線チャートで見た値動きが、場帳ではどのように見えるかを確認するのである。

ただし、あくまでも一時的な「補助車」である。数銘柄だけにとどめ、できるだけ短い期間でやめるようにするべきである。

また、この補助車は、図表2-4のような終値だけの折れ線チャートにしていただきたい。日足でも毎日の4本値(始値、高値、安値、終値)を用いれば、FAIの月足と同じ形式のローソク足が描けるが、月足と同じ形式のローソク足が2種類できるうえに、場帳は終値だけで日足は4本値を用いるという、たいへん複雑なことになってしまうからである。

7. 相場の確率

「予測は当たらないということが前提」と述べた。すると、「FAIクラブの選定銘柄の100%が、目標の2倍以上になった」ことについて、当然疑問が出るだろう。このことについて説明する。

「将来の株価を予測することが困難」である以上、予測を単なる行動のきっかけとして、ポジションおよび資金の管理と、それを行う司令塔となる自らの精神の管理が、相場の決め手となる。したがって、一般にいわれるような確率(勝率)は問題ではない。もちろん、予測の確率が高い方がいいに決まっているが、そこに注力すれば相場の現実を無視した机上の空論となり、実用に耐えない理論しか生まれないのである。

ところが、やることを徹底して狭い範囲に絞り、現実的なことをきちんと考えていくと、結果として確率が上がるのである。

FAIクラブがバブル崩壊の暴落を回避したのも、倒産銘柄を避けて効率よく低位株を選定できたのも、そうした正しいアプローチを守っているからである。

いくら特別な状況だったとはいえ、FAIクラブは相場を12年間も休むことを実行できた。ちまたに見られる「いま、どの銘柄を買って保有するのがいちばん有利か。それを当てよう」というものとはまったく異なるのだ。

どんな投資法でも同じだが、徹底しているからこそ他と差をつけることが可能になるのである。